



一般社団法人
日本建築学会

建 築 文 化 週 間 2018

トウキョウ 建築まち歩き

湯島・本郷



<http://bunka.aij.or.jp/machiaruki/>

不忍池から本郷台地を逍遙する

不忍池からスタートして、まず本郷台地の東側にある「旧岩崎邸庭園」を訪れ、ジョサイア・コンドル(1852 - 1920)設計の「旧岩崎久弥茅町本邸」の洋館(1896/明治29)、岡本春道設計の和館(1896/明治29)を見学します。

岩崎久弥は、三菱財閥三代目の当主。「茅町本邸」というのは、この地がかつては下谷区茅町という地名であり、他に「深川別邸」(現、清澄庭園)と「駒込別邸」(現、六義園)があったためです。当初の敷地は、南は現在の春日通りまで、西側は国立近現代建築資料館を含む湯島地方合同庁舎を含むものでした。

続いて、旧岩崎邸北側の無縁坂(森鷗外の小説『雁』の舞台)を西に向かって上り、上り詰めたところの「鉄門」から東京大学本郷キャンパスに入ります。

東京大学は、1877/明治10年、洋学教育機関の「東京開成学校」と、医学教育機関の「東京医学校」が合併して創設されます。その前年末に東京医学校がこの地へ移転したのが本郷キャンパスの始まりで、鉄門(1878/明治11年、現存せず)が正門でした。正面に建っていた「東京医学校本館」(1876/明治9年、設計:林忠恕)は、現在は「小石川植物園」の一面に移築されています。その後、東京開成学校を母体とする法科大学、文科大学、理科大学に加えて工科大学も次々と本郷に移転し、1888/明治21年には5つの分科大学の校舎が本郷に集結しました。明治時代末に正門(1912/明治45年、総長の濱尾新が構想、設計:伊東忠太、山口孝吉)ができたころには、街路やオープンスペースが整備された都市的なキャンパスとなりましたが、1923/大正12年の関東大震災によって、そのほとんどが失われてしまいました。

現在の東京大学本郷キャンパスを特徴づけているのは、震災復興として建設されたネオゴシック様式の建物群です。東京大学教授と営繕課長を兼任した内田祥三(1885 - 1972)によるもので、その様式は「内田ゴシック」とよばれています。内田による復興計画で建築のデザイン以上に重要なのは、街路と広場によってキャンパスの骨格を構築したことでした。現在に至るまで、本郷キャンパスは時代の要請によりさまざまな増改築や新棟の建設が行われていますが、そこには内田の示した空間のルールが尊重されています。

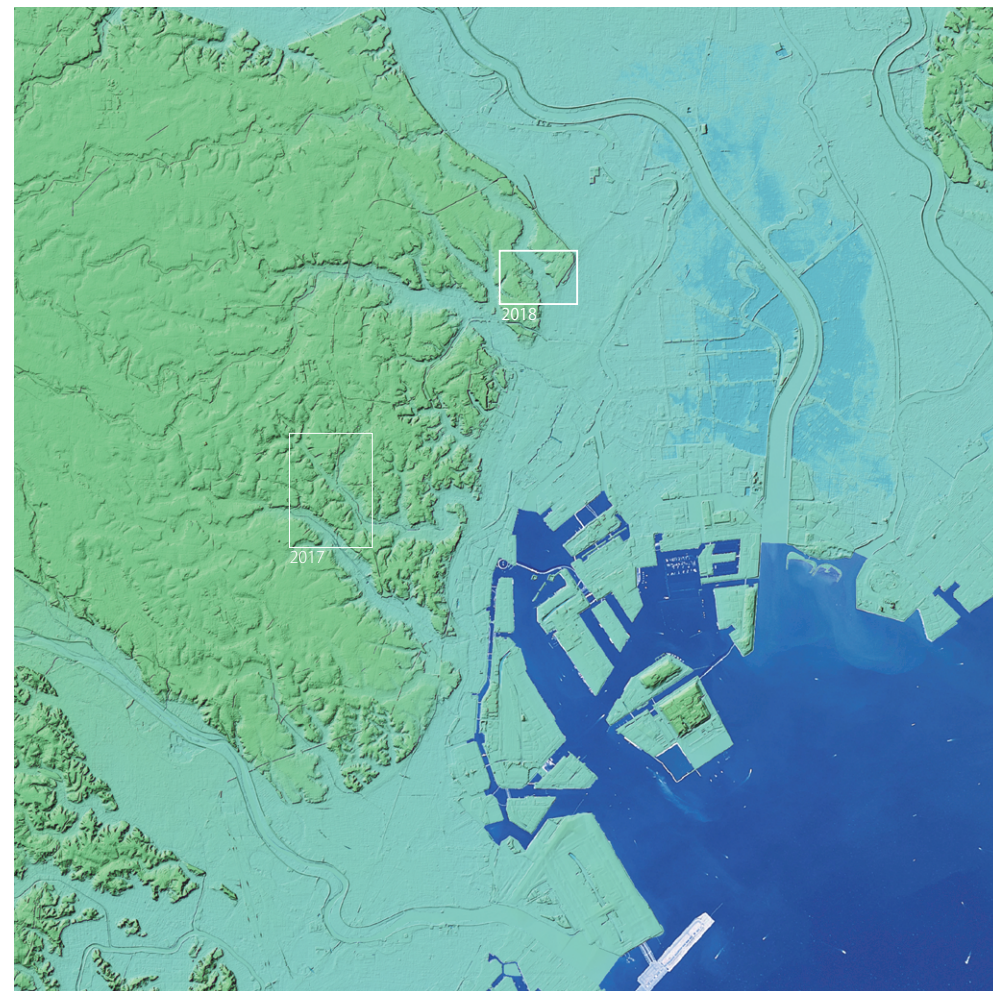
建物の内部は、2014/平成26年に復元的に改修された安田講堂と、1996/平成8年に中庭を室内化するなどの改修された工学部1号館を見学する予定です。

東大の赤門を出て、「求道会館」(1915)と「求道学舎」(1926)に向かいます。

「求道会館」は、真宗大谷派の僧、近角常観の信仰を伝える仏教の教会堂で、2002/平成14年に修復されました。学生寮として建てられた「求道学舎」は、長崎・軍艦島の炭鉱住宅を除いては、鉄筋コンクリート造の最古の集合住宅といわれています。2006/平成18年にコーポラティブ方式の集合住宅にリノベーションされました。改修設計に関わられた近角真一さんは、近角常観のお孫さんです。

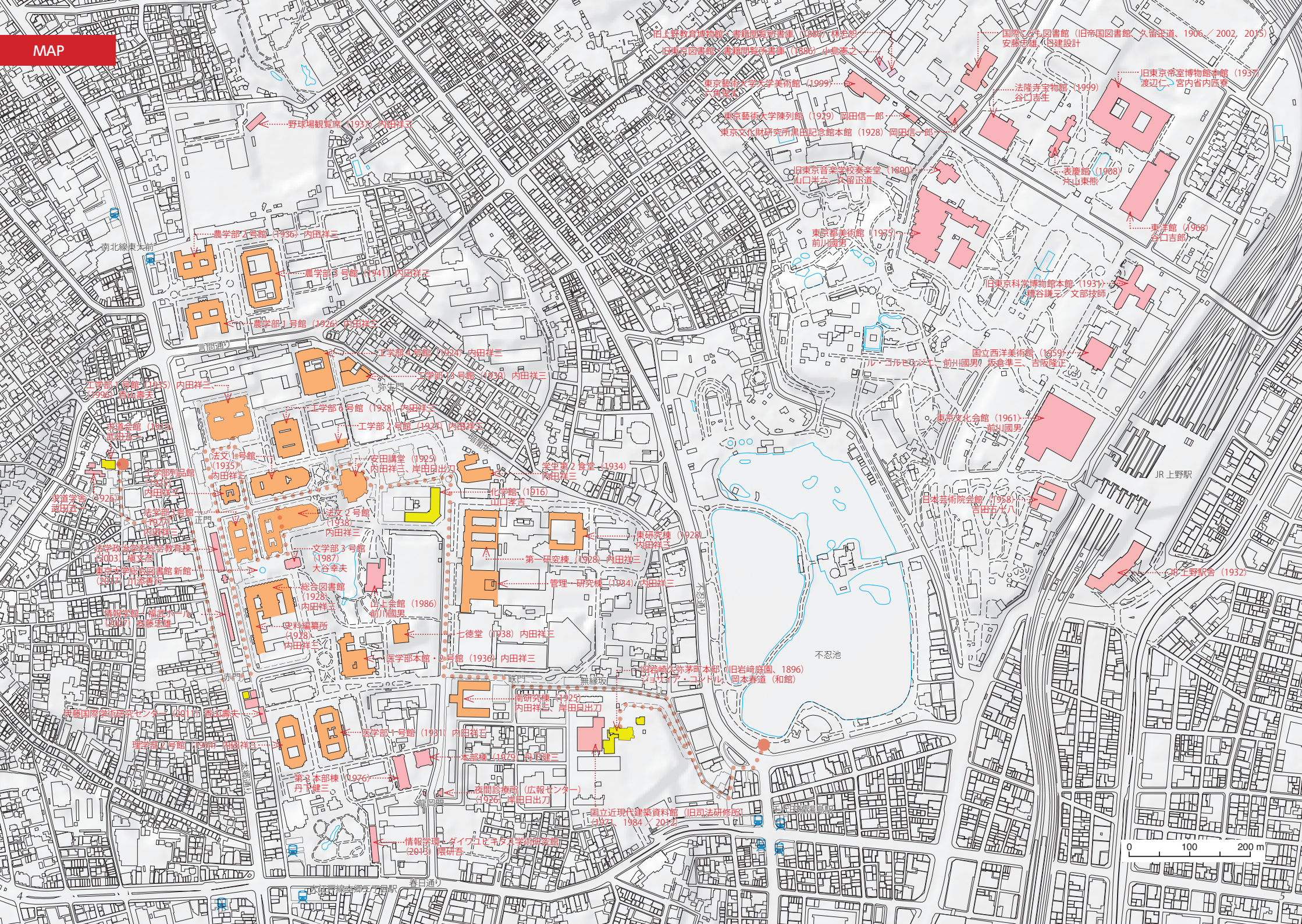
ふたつの建物の設計者、武田五一(1872 - 1938)は、東大卒業後、助教授となりますが、留学から帰国後、京都高等工芸学校(現在の京都工芸繊維大学)図案科教授となり、その後も関西の建築文化の発展に寄与し、関西建築界の父といわれる建築家です。

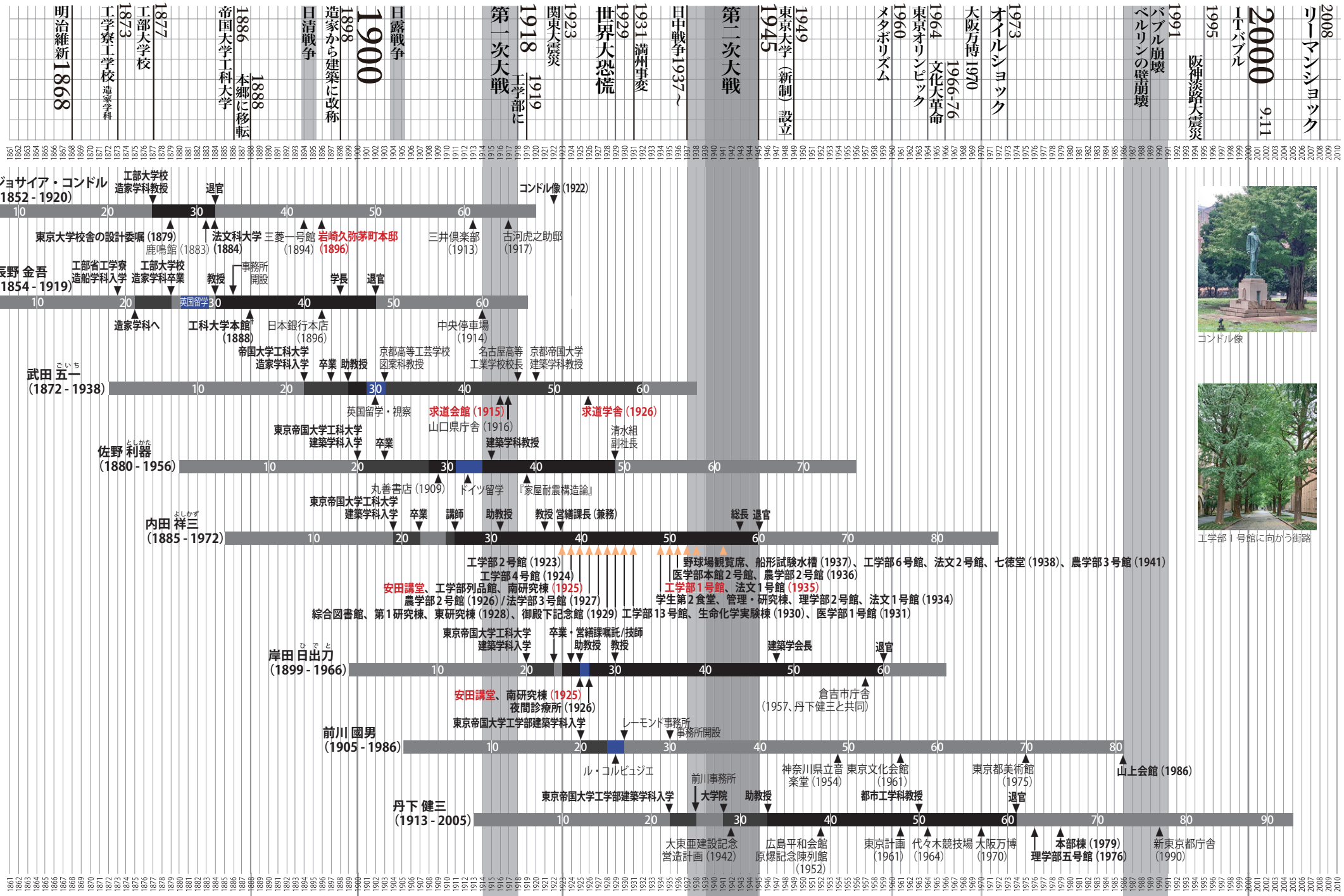
コンドルに始まる東京大学の建築家の系譜は、日本の近代建築の歴史に重なります。彼らの作品を辿ることも、今回の建築まち歩きのひとつのテーマです。



国土交通省国土地理院 地理院地図アナグリフ(カラー)

MAP







解説者：千葉 学（東京大学大学院教授）

近角 真一（集工舎建築都市デザイン研究所代表取締役）

ナビゲーター：大森 晃彦（建築メディア研究所代表）

発行 日本建築学会 建築文化事業委員会

発行日 2018 年 10 月 16 日

© 日本建築学会 建築文化事業委員会 2018

不許複製

建築文化週間 2018

主催 日本建築学会

後援 日本建設業連合会、日本建築家協会、日本建築士会連合会、日本建築士事務所協会連合会

協賛 大林組、鹿島、清水建設、大成建設、竹中工務店、大和ハウス工業、東京メトロ、日建設計、日新工業、
日本設計、三菱地所設計、NTT ファシリティーズ